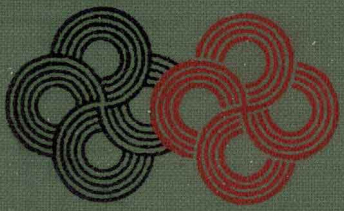

年々随筆＝石原正明
嘉良喜随筆＝山口幸充
烹雑の記＝滝沢馬琴

21

日本随筆大成

第一期

吉川弘文館

日本随筆大成　第一期　第十一巻
昭和三年二月廿五日発行
編纂者　日本随筆大成編輯部
代表　早川純三郎
発行者　吉川半七
発行所　日本随筆大成刊行会

日本随筆大成
〈第一期〉21
昭和五十一年五月六日　印刷
昭和五十一年五月二十日　発行
編　者　日本随筆大成編輯部
発行者　吉川圭三
発行所　株式会社　吉川弘文館
〒113　東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三―九一五一〈代表〉
振替口座東京〇―二四四番
製　作＝株式会社　たんちょう社

解　題

本集には、年々随筆、嘉良喜随筆、烹雑の記の三種を収める。

年々随筆　六巻

石原正明（いしはらまさあきら）著

本書は著者が享和元年から文化元年に至る間に、何くれとなく草された随筆である。毎巻の後に脱稿の時期が誌されている所から、無雑作に年々随筆と名付られたものである。然し本書は近世国文学者の草した随筆中最も優れたものの一つとして世に迎えられている。著者の師塙保己一は、群書類従其の他、温故堂出版関係の物を納めて置く庫の必要を感じた。而して幕府の許可を得て品川御殿山下にこれを建てた。敷地千六百坪である。建物庫などが出来上ると、此等を管理保管する人が必要である。この任に当って、留守居を兼ねてここに移り住んだのが正明であり、時は寛政十年九月末の事であった。この独居の筆のすさみが本書である。其の荒まさった荘居（ヤドリ）に

人住まぬ不破の関屋の板びさし荒にし後はただ秋の風

の一首を名歌の第一に推し、日常口吟して暮していた、当時三十八歳の人の感興と風景の写し出されている状景を、明田雙瓶氏は驚くべき情操と神経の所有者と評して居られる。

次に古典学者としての随筆に対する意見を一寸窺いてみよう。

随筆は、みきく事、いひおもふ事、あだごとも、まめごとも、よりくるにしたがひて、書つくるものにしあれば、常にはいとよくしりをる事も、忘れてはひがごといひ、浅まなる考どもゝ立ま

じり、文章もえむにこまやかにはふとえ書とらで、こちゝくしくつたなき事などもありて、さまあしき物ながら、さるつくろひなきものなるゆゑ、心いきざへのほど、器のかぎりもみえて、中々おもしろきものなり。

と述べて、宣長の「玉かつま」や天野信景の「塩尻」、さては枕草紙、徒然草などの事に及んでいる。先師宣長の説についても「徒然草を論ぜられたる、ことはりはことはりとして、をかしげなし」と評しているのなど、宣長の訓詁の学には服しているが、古典の味読点に於いては、必ずしも師説に盲従する事の出来ない鋭い感性を持っていたと思われる。これは新古今集の註解なる「尾張廼家苞」によっても云われる事であろう。ここに宣長を去って、保己一の門下として、其の一生を終る事になった所謂もあろうか。

次に小沢芦庵のことから、著者の生活の事を記している一条があるので、今一つ本文を引用しておきたい。

芦庵のわかゝりし時、いとまづしかりけり。物かふに価の三ツたらざりければ、隣にこひかりてかふ。さてよめる。

くやしくもなにはのみつのあしをなみこと浦かけてかゝせつる哉。」あはれに心ぐるし。正明も市谷わたりに、蝸牛ばかりの身をいるゝ宿はありながら、朝三暮四に心ぼそし。

あはれともみやはとがめぬ浅間山あさましきまで細きけぶりを。」すぐせとはおもひつゝなむ。

本書の内容を抄記していたら限がない。この辺にとどめたい。

本書には普通の刊本のように、序文や跋文は全くない。ただ巻末に其巻が稿を成した年月等、簡単な著者の文章があるばかりである。題簽も版下も著者の自筆に拠るのであるが、刊記さえもない。恐ら

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

くは私家版であろうか。本書再刊に当っては、内閣文庫蔵の版本と国会図書館本を参照使用した。

石原正明　初めは名は将聴（まさあきら）、通称は喜左衛門また文内、蓬堂と号した。父は文右衛門と云い、尾張国海東郡神守駅に住し石原家の第五代、正明はその二男であった。家は農家で、五百石斗の高があったと云う。喜左衛門は生来農業を好まず、読書に耽り漢籍を専らとし、書籍を買い、酒を買って産業を顧みなかったと云う。当時名古屋では有職故実、律令等の研究が盛んで、河村秀根、神村正鄰、稲葉通邦、山高信順等と令義解その他の研究会を催して、互に研鑽に努めたと云う。後年正明に冠位考など有職関係の著述のあるのはここに胚胎している。本居宣長との関係は、その門人録寛政四年の筆頭に「尾張　神守駅　石原喜左衛門　正明　初将聴（マサアキラ）　二月入門」とある。この年三月には宣長は名古屋を訪うて門人達とも会し、廿七日には松坂に帰っている。而して正明は漢文の餞を書いて送り、宣長はこれに返歌を送っている事が「鈴屋集」四の巻に見え、なごやかな師弟の情が溢れている。石原正明についての小伝は、青木辰治氏の「尾張に於ける本居学と石原正明」が、尤も見るべき文献であろう。石原家の後裔をも尋ねられた文献である。ところで今一つここに森銑三氏の紹介せられている本間遊清の「耳敏川」七十の巻に石原正明の伝がある。これは宣長から保己一の門人となること、正明の晩年の事も記してあり、他に見えぬ内容であるから、これも抄記しておきたい。

……其頃伊勢にて本居宣長もはら和学を唱へて、漢学をそしりけるを、いみじうふくみ、いかで我伊勢に行て、漢学もて彼をいひふせんとて、かの国に越にけり。扨たいめして、古今和漢を論談しつるに、本居や学識まさりけん、遂にいひふせられにけり。是よりやがて名簿をおくりて其門に入りぬ。

宣長入門前にこのような事があったであろうか、正明は其より更に学問に専念、尾張にも居にくくな

り、江戸に出て諸家に侍奉公などして転々とし、遂に紹介する人があって塙保己一の門に至り、其の学才を認められ「塙は盲人故、常に石原正明といふ門人を連れて歩かれたが、この者博学多才にして、先生にも劣らぬ者なり」（朝岡正幸の「袂草」）と云われ、塙検校の学頭として重んぜらるるに至った。其の死歿については、安藤菊二氏が、刈谷図書館蔵の「梅処漫筆」三十四冊中の第二十四冊（寺島恒固著）から、左の記事を抄記しておられる。

己卯（文政二年）八月二十三日川田勾当ノ家ニテ石原氏ニ邂逅ス。其詠歌若干ヲキ、テ左ニ録ス。

石原氏名正明　称喜左衛門海東郡神守郷人
当遊東都二十六年今年暫帰郷里云
辛巳正月　名古屋ノ偶居ニ卒（「伝記」九巻七号）

正明は性豪爽洒落で、常に酒杯を放たなかった。病に冒されてから言語もさやかでなかったと云う。文政四年正月七日名古屋で歿した。病は中風症であろう。享年六十二。始め神守村字三昧に葬ったが、後邸址の西北宅地内の石原家墓域に改葬せられた。其の墓石の写真は『文学遺跡巡礼』国学篇第二輯の富田静子氏の「石原正明」の稿に掲げられている。最後に青木辰治氏の石原家を訪われての研究に、其の系譜の下に正明には妻子の記載はなく、氏も「元より妻子なく」と記して居られるが、「耳敏川」の妻子ありという記事は一説としてやはり捨て難い様にも思われる。後の研究を俟つことである。

嘉良喜随筆　五巻

山口幸充（やまぐち　こうじゅう）著

本書は好学の著者が、心の赴くままに先人の著作随筆を抄写したもので、随筆と云うよりは雑録と称する方が適当ではあるまいか。大半は黒川道祐の「遠碧軒雑記」其の他よりの抄記で、松岡玄達の「詹々言」や多田義俊著の「南嶺子」なども資料として引かれ、時々割註を附して寸言をつけている。勿論自らの心覚えが主であるが、掻破り捨てるのも惜しいと思う事であろう。誠にこの五巻の抄記は、神道家であり国学者でもあった著者の心に留めて写したものだけあって、興味あるものもあるが、項目も多く索引でもないと一寸使い切れないように思う。それほど断片的で全体としての潤いがない。これは一つには私が著者に就いて知る所が少ないことにもよるであろう。

幸充は神道家浅利太賢に先ず其の道を学んだ。次いで尾州の人松岡丈雄に垂加神道を聞き、吉見幸和の門に至り、神道家とし大成したようである。「南嶺子」抜抄のうちの割註に、「予去年ヨリ尾州吉見風水翁ニ属シ、国学ノ師トス。国史官牒ニ自負ノ意ハ粗アリトミヘドモ、開闢已来ノ一翁也。予又何ヲカ云ハンヤ。六十ニ垂トス。」以下「神代正義」等その著述数部を挙げ、「仰而是ヲ学ビ、同志タル時ハ、今迄ノ疑ヲハラシ信仰スルノミ。其日次醜満、嘉良喜随筆以下許多ノ雑記者、楽天ニ章句ノ癖アルゴトク、鄙事ニ多能、好事ノ士トナユルシ給ヒソ。若自今愚得アラバ、外ニ記スベキノミ、呵々。」とあるのは注意すべき記事と思う。吉見幸和は、宝暦十一年四月二十六日、八十九歳で歿している。すると幸充が幸和に入門したのは享保十七年頃であろうか。

次にこの写が何時頃なされていたかは、其様な記載がないからはっきりしないが、婚礼に「女ノ方ヨリ盃ヲ始ムル云々」と云う条の割註に「今年庚午ニハ十月ハ勿論、十一月迄雷鳴ス」と云うことが

見える。庚午は幸充の生活年代としては寛延三年であろうか。この頃書き進んで居たのであろう。

さて本書再刊に当って、内閣文庫写本（四巻本）を校正本として比校した。

山口幸充は、日向の人で、白梅軒と号し、垂加流の神道家と云うだけで、他に知られる所がない。師弟関係などは上記本書に記載の事より以上に知られない。

烹雑の記　二巻

滝沢解（たきざわかい）編

本書は、「燕石雑志」に続く著者の随筆の第二集である。本書については、著者自身「江戸作者部類」中に云う所を見よう。

六年己巳燕石雑志六巻を編述す。随筆也。〔割註〕大坂河内屋太助板也。」当時合巻冊子読本流行して、曲亭に新編を乞ふ書賈年に月に多し。この兀紛中雑志の撰あり。こゝをもて思ひ謬てることとたえずといふ。八年辛未の秋金毘羅利生記一冊を綴る。英平吉の需に応ずるなり。この年又烹雑の記二巻を編撰す。書賈柏屋半蔵の需に応ずる也。〔割註〕半蔵没後、この板下谷池の端なる貸本屋が購ひたりと聞にき。しかれども再刷したるや否を知らず。この書と燕石雑志は大本也。」

とある。

本書には、巻頭に自序、次に亀田鵬斎撰の瘞筆塚銘、狩谷望之篆額等を掲げ、先ず概略を草し、本書が童蒙のために国字を以て写したこと、書賈のために僅かの日数で成した事などを述べて、何となくさらっとしない所があるが、内容は博識である著作の才能は十分顕われている。巻頭には新掘山として道灌山の事を記し、次いで佐渡の事に移って行く。佐渡には石井夏海（嘉永元年六月十三日歿、

年六十六）と云う才人が居て、画は文晁門人、狂歌は北川真顔門人などで、馬琴、三馬などとも親しかった。この夏海の名前も本書に出て来るが、馬琴の夏海に贈った手紙が大田才次郎輯「古今名家尺牘文」に出ている。

……去夏中御注文被仰候拙著燕石雑誌、烹雑の記、脚カへ附属いたし候、定而御下手被下事と存候。烹雑の記中たこふねは甚僻案、是は御案内のごとく、殻ある小章魚（こだこ）、浪にうき乍ら殻の中よりかしらを出し、帆の如くして走り候ものを、浦人たこ舟と申ならはし候由、かねて伝聞（つたへきく）候をとんと失念、出版後思ひ出し、後悔いたし候。定めて御地の事などには、伝あやまり多く可レ有レ之候、錯誤は無二御腹蔵一可レ被二仰聞一、後学に備申度候。

馬琴の佐渡の資料は多く夏海から得たものかと云われている。この書には蒲生秀実も当月六日歿候とあるから、文化十年のものと思われる。本書「後妻打」の附に孝女花扇のことが出ている。これも世の注意を引いたらしく、安西雲烟子編の「近世名家書画談」第二編三巻に、「崎陽客江戸の花扇に詩を寄る事」として「滝沢瑣吉子が記に二十年前（寛政二年を云）北里五明楼なる花扇といひし遊女老母に孝行なりとて其事を板して巷に売るものありし云々」として、花扇の筆蹟や、名家の詩や和歌が挙げられている。これは本書の余聞という所であろうか。この花扇は四代目花扇である事を畏友向井信夫氏より示教にあずかった。

本書には、柳々居辰斎（北斎門人）、勝川春亭（磯田春英門人）及び馬琴の男、琴嶺の筆になった挿画があって、本文の硬さを和らげている。

最後に本書は三巻本が流布されている様である。著者自身は二巻本とはっきり断言しているのに、妙な事と静嘉堂にある三冊本を見ていたら、思いもよらぬ丁数の乱れがあり、上巻は「新掘山」より

「天狗」まで、「夷三郎」以下「先板の訛舛」までが下巻であったらしい事がわかった。而して出版書肆も池の端の貸本屋ではなく、馬琴の「椿説弓張月」以下多くの書を刊行している中全堂　釜屋又兵衛（両国吉川町）の板である。静嘉堂本は改装本であるから、他にもっといい三冊本を見ねば確言はしかねるが、中巻には大部分が上巻に入るべき丁数があり、下巻の初めに見える「夷三郎」がついている始末である。最後は「先板の訛舛」であるべきであるから、この乱れが何によって起ったか一寸見当がつかない。本書再刊に当っては内閣文庫本を校正の比校本とした。

滝沢解　曲亭馬琴については本大成本二期一巻「兎園小説」の時に略記したから同巻の解題を見られたい。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

目次

年々随筆……一
嘉良喜随筆……二九
烹雑の記……四三

（解題　丸山季夫）

年々隨筆

年々随筆 一　辛酉上

石原正明著

花はさくら、桜多かる山に、松など立まじりて、色どりわけたらむやうなるが、一しほ見所あり。友だち四五人ばかり、一とせあらし山の花見に行し事あり。けふぞさかりならむとおぼゆるほどにて、かつちるもあるに、渡月橋のこなたを、川ぞひにみなかみの方へゆく。風のさと吹あるゝに、雪かとばかり乱るゝ花の、となせの滝の岩なみに、やがてまがひ行など、いひしらずをかし。中野三郎といへる人、川中の大きやかなる巌に腰うちかけて、ふえ高やかに吹ならしたるが、水音にひゞきあひてをかしきに、かたへにありつる法師、春おもしろくきこゆるはと、打ずしたりしこそ、折からをかしうおぼえしか。此法師、いづくの人なりけむ。心にくきけしきなりつるを、物をだにいはで、やがて行別つるは、くちをしき事なり。

月は水のほとり、ことによろし。いと大きなる川の、のどやかにながるゝあなたの岸にまとゐして、打わらひなどしたる、から人の登りけむ南の桜おもひ出られて、誰ならんとゆかしきに、千里に明らかなりと詠ずるにやあらむ。ほの〴〵きこゆるいとをかし。

雪はいづくも〳〵をかし。たゞ海のみすさまじげなり。それも、みなと江の蘆、すこしばかり折残たるひまに、とまり舟二ッ三ッ、篷いとしろうみゆるはをかし。

市の中は、何事もめとまる事なけれど、たゞ雪の朝こそ、めづらしうをかしけれ。すべていづくも雪はけ

しきことに、所かはりたる心地して、めづらしうをかし。日のさしのぼるほど、皆おきいでゝ、行来さかしきまで道あしうなりぬべし。いとあぢきなし。とくはきあつめよ。取すてよなど、いひさわぐこそかなしけれ。

月のいと清き夜、大きやかなる松のなみたてるを、程隔て打みやりたるは、土佐家といへる絵のさましたり。今の世に、から絵とて物すめるは、さるおもむきなし。

皇国に某州といふ制はなきことなるを、城州、和州などやうに称るは、みだりなる事なり。されど此事、いと昔より有こしなり。大同、弘仁のころの詩人などやいひそめつらん。すでにしかむかしよりいふ事なれば、今人のいはむ。はたとがむべきにもあらず。又某陽といふ事は、いつの頃よりいひそめけむ。二百年ばかりの書にはみゆるを、猶ふるくも有つらんかし。ふとはえおもひいでず。これはいと〳〵すぢなき事なり。さるはから国に、某陰、某陽といふ所の多かるにならひてのわざなめれど、かの陰陽は、南北のかへもじにて、山にそひ、水にそひたる地の、その山水の南北につきて、よぶ事にこそあれ。皇国の人の、伊勢を勢陽、尾張を尾陽といふたぐひにはあらず。洛陽、華陽などきこゆるも、洛華は山水の名ぞかし。益州を益陽、荆州を荆陽といへる事はあらじ物をや。

太宰弥右衛門ときこえし人の著れる書どもに、日本信陽太宰純となのるこそ、いと〳〵心えね。まづ漢人、唐人の漢唐にむかへて、日本といへるは、ことのさまたがひたり。漢唐は世の名にて、国の名にあらず。日本は国の名にて、世の名にあらず。相対ふべきことわりはなきに、それをだにおもひえざる、いとはかなし。次に信陽といへるはいかに。信は山の名か。水の名か。此人の皇国の事論じたる、悉ひがごとながら、それはむねとせぬ学問なればと、ゆるさるゝ方もあるを、おのが故郷のやうにいひおもふ土の地名の、陽の字の義をだにえしらぬは、いかなるから物まなびぞも。

鳴弦とて、ゆづる打ならして。邪気をさくる事は、今の世の射礼家にて物するやうに、こと〴〵しくこそあらざりけれど、やゝ上代よりある事にて、物にみえたり。神代の遺れる風（ワザ）にやあらむ。さて万葉集一の巻に、八隅知之、我大王乃、朝庭、取撫賜、夕庭、伊縁立之、御執之、梓弓之、奈加弭（ナカハス）乃、音為奈利とあるを、奈加弭はなり弭の誤にて、弭に鈴などつけて、ことに音あるやうに設たるなりといふ説あれど、鈴つけたらむからに、なり弭とはいかでかいはむ。今按（オモフ）に。弭は弦の誤、奈利弦（ナリツル）にや。さやうに弓弦打ならす事は、御狩、軍陣などのねぎごとならんかし。同巻に、丈夫之、靫乃音為奈利、物部乃、大臣、楯立良之母とあるも、さるをりの出立のわざにやとおぼし。相てらしみるべし。又夜をまもるものゝ、弓弦ならすこともあるは、警衛のためながら、猶此わざのおなじ源なるべし。

辛酉は、革命とていみじうあしかる事とぞ。何事のあらむとすらむ。ゆゝしき事なり。それも運によりてあたらぬこともありとぞ。諸道の勘文をめさるといふ。ことしはあたれりや。あたらずや。きかまほし。寺々にも仰事ありて、御祈どもありときくは、いみじう尊し。其みす法の名、金門鳥敏、々々々々とは、カノトノトリノトシといふ事なりとぞ。まことにやあらん。はかなだち、戯にちかくて、御法の尊くめでたかるべきには、打あはぬこゝちす。例なれば改元あるべし。寛政といふ年号、政の字、はじめて用られつるに、十三年までつゞきて、造内裏以下、よき事のかぎりなりつれば、めでたき例（タメシ）にぞなるべき。

辛酉の改元は、延喜の度をはじめとす。清行の宰相の勘奏によられたるなり。さるは易緯に、辛酉為二革命一。甲子為二革令一。とありて、鄭玄が説に、天道不レ遠、三五而変、六甲為二一元一、四六二六交相乗、七玄有二三変一、三七相乗、二十一元為二一蔀一、合千三百二十年とあるによりて、神武天皇元年を一蔀の首として、斉明天皇六年庚申まで、千三百二十年、天智天皇即位の年〔割註〕斉明天皇八年。」の辛酉を、第二の蔀首として、昌泰三年まで二百四十年。四六相乗の数みちて、延喜元年は、大変革命の運なりとぞ。も

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo